
ひまわり ミススピリッツ

はりねずむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひまわり シスピリツ

【Zマーク】

Z2336V

【作者名】

はりねずむ

【あらすじ】

私立黒蜜学園を影から支える者たちの活躍を描く物語。

関東某県私立黒蜜学園。

この学校では完全なる生徒主権が掲げられている。

学校設備の改善、新たな部の創立など、生徒からの要望が多ければ、かならず実現する。

だが、全生徒に大きすぎる権力を「与える」とは学校の荒廃を招くことになりかねない。

そこで、校内に於ける全決定権を所有し、学校のルールブックとなる存在を選出した。

その人物は、黒蜜学園生徒会会長、ほつじょうたいくわい法条蒲公英である。

と言つても、この物語の主人公は彼女ではない。

隠密治安維持部、通称“ハウンド”、ここに所属する者たちが主人公である。

彼らは学園を影から支え、決して陽の光を浴びることはない。

法条蒲公英が学園を明るく照らす太陽であるなりば、隠密治安維持部は夜空に浮かぶ月。

立場は全く違うが、彼らには決して揺るがない共通点があった。

それは、“愛”と“正義”である。

各々の思つ正義に違ひはあれど、彼らは自らの信じる道をただ突き進んでいる。

そして、それぞれの思いを胸に秘め、部長の姫咲向日葵さきざきひまわりを筆頭に個性的な部員たちは今日も戦うのであった。

5月8日

今日も空は青い。この空よりももっと上空に存在する宇宙が、本当に暗黒の世界なのか疑わしく思えてくる。

ブブブ・・・・！

私の哲学的な思考は、携帯電話の着信音によって停止をせられた。

「ターゲットは捕獲できたの？」

「すんません、まだッス。現在、屋上に向かって逃走中。」

何処に逃げようが構わないけど、よつこよつこ屋上とはね。

「はあ、いいわ、私に任せて。」

通話を終えて携帯電話を折り畳むと同時に、鉄の扉が勢い良く開いた。

屋上に足を踏み入れたのは、眼鏡を掛けた陰気臭い男子生徒で、私を見るなり後ずさつて尻餅をついた。
女の子に対してそのリアクションはどうかとも思うが、まあ、いい。さつさと終わらせる。

「なつ、なんで屋上に人が！？」こなう見つからぬと思つたのに

！」

慌てふためく男子生徒を後目に、私は黒い革の手帳を開く。

ふむ、下着泥棒の疑いと執行部への暴力か。あ、屋上への侵入も付け足しね。

「なんでここに私がいるのか。それはね、君みたいな子悪党を処理するためよ。」

赤い文字が刺繡された腕章を見せると、彼の顔面は一気に蒼白になり、ガタガタと震え出した。

「馬鹿な、そんなの、ただの七不思議じゃないか！？存在しているはずがない！！」

ああ、そんな噂を聞いたことがあるわね。

確かに、『校長先生が鬼神連合会の元会長』に並んで信憑性が高いとか。
・・・いや、違うな、こんな無駄話に付き合つてる場合じやなかつた。

座り込む男子生徒に歩み寄り、腕章を突きつける。

「七不思議？笑える冗談ね。七不思議も何も、君が今見ている腕章が証拠なの。

私たちは実在している。そして、今回の任務は下着泥棒を執行部に引き渡すこと。

特注品の学ランの懷に縫い付けられたホルスターから、モデルガンを抜く。

「【S & amp; W M19】、コンバットマグナムって言った方が伝わるかしら？」

「私はね、君たちみたいな姑息な輩が大嫌いなの。」

額に銃口を押し当てながら言つ。彼の体の震えがモーテルガン越しに伝わってきた。

男子生徒の顔が恐怖に歪み、今にも泣きそうになつてゐる。その顔を見て、私は無性に腹が立つた。なんでお前が泣きそうな顔をしている、その権利があるのはお前じゃない。

泣く権利があるのは、お前が傷つけた女子生徒だ。

引鉄に掛かった指に力がこもる。

私の殺氣を感じ取つたのか、男子生徒は言い逃れを始めた。

「ま、待つてくれ！確かに僕は執行部から逃げたし、屋上にも侵入した！それは認める！だが、下着泥棒は誤解だ！その証拠に、下着なんて持つていないだろ！？」

この期に及んで、まだそんなことを・・・。

その根性には、呆れを通り越して尊敬すら覚えるわ。

「ちょっと黙つてくれない？それとも、口の中に弾を撃ち込まれたいのかしら？」

まあ、どっちにしろ、君には少々痛い思いをしてもらわないといけないわね。

そうでないと、私の気が収まらないのよ・・・。」

銃口を鳩尾へと向ける。本当は顔にぶち込んでやりたいが、さすがにそれはまずいだろ。多少改造しているため、威力は折り紙付きだ。

おそらく苦痛にのたうち回るだろ。想像するだけで顔が綻んでしまつ。

「 まあ、おしおきを始めましょつか。 」

私が引鉄を引こうとした瞬間、再び屋上の扉が開いた。

「 部長、それは執行部の仕事じゃないスか？」

私の部下、大貫山茶花おおぬきさわんかだつた。彼は私と男子生徒の間に強引に割り込み、何も言わずに「コリ」と微笑んだ。私は銃を懷に戻しながら、山茶花に指示を出した。

「 ・・・彼を拘束して。執行部への引渡しは君に任せるわ。事後処理もいつもどおり、

“富流璃”と協力して行なつて頂戴。」

「はいはい、お任せあれ。さて、これから君を執行部に引渡すわけだが、安心したまえ。

あそこの取り調べはソフトだからね。

少なくとも、いきなり改造モデルガンの弾を撃ち込まれる心配はないから。」

山茶花は手錠を掛けながら軽口を次々と並べていく。

彼は非常に優秀な部下であり、その能力を高く評価している。だが・

・・。

「ねえ、山茶花。」

私の呼び掛けに山茶花が顔を上げた。私は、彼の切れ長の細い目を見つめた。

「 ・・・いえ、何でもないわ。じゃあ、頼むわよ。」

「任せといて下さい。」

そう言って、山茶花は小さく笑いながら男子生徒を連れて屋上を去つていった。

鉄の扉が閉まると、一陣の強い風が吹いた。

「大貫山茶花・・・。彼からは、深淵よりも深く暗い闇を感じるわ。

「確かに油断できない男だけど、ああ見えて、私が最も信頼している部下よ。」

声の方向には貯水タンクがあり、その上に一人の女子生徒が仁王立ちしていた。

腕を組み、ただならぬ威圧感を振り撒く彼女の名は、法条蒲公英。

黒蜜学園の生徒会長であると同時に、執行部の部長でもある。

蒲公英はたまにチラツと見える下着を隠そともせず、私を見下して話を続ける。

「彼はいざれ、この学園に災いをもたらすような気がする。部下の手綱はしっかりと握つておくことね。ただでさえ個性派が揃つているんだから。」

彼女の勘は必ず当たる。良い悪い関係無く、全て当たるのだ。

「縁起でもないことを言わないで頂戴、怖いじゃないの。

どうせ“侘助”^{わびすけ}のことを言つてるんでしょうけど、彼も意外に好青年なのよ？」

「そうね、でなければ、『ハウンド』で人の為に働くこうなんて思わないでしちゃうね。」

私をあそこにねじ込んだ張本人が何を言つた。

彼女が生徒会長と執行部部長の権限行使して、色々と根回ししていたのを知つている。

大方、他の部員にも同じ手を使つたのだらう。

蒲公英のピンクの下着を眺めながら、私は小さな溜め息をついた。

「はあ、こんな誰も寄り付かないような所に隔離されて、呼ばれればお仕事つて、

私はどこぞの大魔王なのかしら?…まったく、勘弁して欲しいわ。」

言つた瞬間、蒲公英を取り巻く威圧感が霧散した。

夜明けの静けさのも似た穏やかさが彼女から感じられた。

「そうね、もつと頑張つてくれるなら、生徒会の情報網を駆使して
いくらでも素敵な好青年を紹介してあげる。」

「これ以上どう頑張れといつのか。もしかしたら、蒲公英は私を殺す
気なのかも知れない。」

もう一度軽く溜め息をついて、私はやや西に傾き始めた太陽を見た。

「遺書でも書いておこうかしら……。」

放課後になり、全校生徒が下校したことを確認してから、蒲公英の住むアパートに

真っ直ぐ帰宅した。

蒲公英の両親は彼女が幼い頃に亡くなつており、彼女は一人暮らしだ。

また、私はとある理由で両親から疎まれていて、非常に自宅に帰りづらくなつてしまつて

いるために、蒲公英の部屋に居候させてもらつていて。

やや錆び付いた鉄の階段を上がり、203号室のドアノブを回した。扉を開けると、美味しそうな香りが私を出迎えてくれた。

「ただいま。この臭いはシチューかしら？」

玄関の横の台所では、エプロンを身に付けた蒲公英が鍋の中身をかき混ぜていた。

タンポポのアップリケが縫い付けられたエプロンは、彼女によく似合っていた。

「そう、大正解。『都合主義的にシチューの材料が安売りしてたから。』

「『都合主義つて……。』

私は苦笑いしながら靴を脱いだ。居間に鞄と学ランを置き、普段着に着替えた。

「昨日、寝る前にシチューが食べたいって言つてたじやない？」

蒲公英がシチューを混ぜながら話す。私はお世辞にも料理が上手いとは言えないのに、

居間でくつりがせてもらっている。

「あら、聞いてたの？寝てるとと思つてたわ。」

「最近はよくやつているみたいだから。まあ、ささやかなご褒美つてところね。」

私は不良だが、礼儀には人一倍厳しいと自負している。なので、照れながらもお礼は欠かさない。

「蒲公英、ありがとう。」

鍋を居間に運んできた蒲公英は、少しだけ驚いた表情を浮かべた後、これまた少しだけ微笑んだ。

「素直なことはいいことよ。さあ、お皿を出して？夕飯にしましょう。」

立ち上がり、台所の食器棚へと向かう。私が皿を出していると、蒲公英が話し掛けてきた。

「麻雀部の“渡瀬”^{わたらせ}って生徒、知つてる？」

「渡瀬？いいえ、知らないわ。」

卓袱台に皿とスプーンを置き、蒲公英の向かいに座る。

「麻雀部部長、2年A組“渡瀬秋桜”^{わたらせしづか}。」

「コスモス、ね・・・。可愛らしい名前じゃない。清純派アイドルみたいで素敵だわ。」

シチューの注がれた皿を受取りながら答えると、「真面目な話よ。」と諫められた。

「公にはされていないけど、最近、彼女の飲んでいた紅茶に少量のアルコールが混入された事件が起こったわ。」

「アルコール、てことはお酒？部員の悪戯じゃないの？まあ、確かに問題だけど。」

これに対して、蒲公英は首を横に振った。

「私も最初はそう思つたんだけど、違つたのよ。彼女、異常なまでにアルコールに弱くてね、匂いを嗅いだ程度で酔うらしいの。

しかも、その酔い方が最悪でね、通りがかつた屋台の酒の匂いに酔つて、

暴れて屋台を半壊させたらしいわ。」

半壊、ねえ・・・。シチューの中の肉をスプーンで転がしながら、蒲公英の言葉を頭の中で咀嚼していく。

「だとすると、渡瀬さん、だつけ？ 彼女が大暴れしたと、生徒たちが騒ぐはずよね。

山茶花からもそんな話は聞かなかつたわよ？」

「・・・執行部が内密に処理したのよ。謎の人物からタレコミのおかげで、

早い段階で手を打つことができたわ。目撃者もなし。」

なるほど、執行部が裏で糸を引いていたのなら理屈は通る。だが、執行部で処理できるのなら、蒲公英が気にすることでもないだろう。

私は蒲公英の皿に入つていた大きめの肉を奪い、口に放り込んだ。

「ちょっと、なんてことを・・・！ 食べ物の怨みは怖いわよ？」

覚悟は大丈夫？ 腹は括つたかしら？」

「ねえ、蒲公英、あなたは生徒会長なのよ？ 全校生徒のお手本たるべき人物が、

醜いボディなんてダメでしょう。私はお手伝いしただけよ。」

スプーンを握る蒲公英の手が怒りに震えている。

「ただじゃおかないから、覚えてなさい……。」

怖いことを真顔で言うんだから、余計に怖いつての。やんわりと滲みだし始めた威圧感を受け流しつつ、当初の疑問を投げ掛けた。

「じゃなくて、執行部が抑えられるんでしょう? なら、あなたは別に気にしなくていいんじゃないの?」

「……渡瀬秋桜によつて、執行部の主力の大半が病院送りになつたわ。

それから、裏で何者かが動いているわ。」

彼女の話を聞く限り、どうやら私たちも動かなければならないうだ。

執行部の主力と言えば、卓越した武術を使いこなす。私が彼らの力を借りることも少なくない。

「言つまでもなく罷でしよう、敵は渡瀬秋桜の力を使って執行部の戦力を削りに来た。で、黒幕の正体は掴めているのかしら?」

私の問いに、蒲公英は溜息をつきながら首を振つた。

「この件に関しては、生徒会として調査を依頼しているんだけど、おかしなことに全く情報が入つてこないのよね。」

「……生徒会内部の人間が情報を遮断している?」

生徒会は結束がとても固いと聞いていたから、私は自分の推測にもかかわらず

目を丸くした。しかし、蒲公英は私の推測をあっさりと肯定した。

「たぶん、私の後釜でも頂こいつって腹でしょう。

生徒会も、一枚岩ではないといふことよ。」

生徒会の裏側、それもかなり深い部分を垣間見た気がした。
それから、他愛ない世間話をして夕食を終えた。

「「」うそさま。」

「お粗末様でした。」

私たちは、皿を洗つたために台所に並んで立つた。

「こればかりは私も手伝わないと、彼女に申し訳ないからだ。
二人でやれば作業も捲るもので、皿洗いはあつと言つ間に終了した。
エプロンで手を拭きながら、蒲公英がやや楽しそうに声を掛けた。

「さて、お楽しみの入浴タイムよ。」

「あなたの、でしょ。一緒に入るのはいいんだけど、
あんまりジロジロ見ないで欲しいわね。」

文句を言つたが、いつもどおり、彼女は聞こえないふりをした。
呆れながら、私は蒲公英と風呂場に向かつた。

蒲公英が髪を洗つている。彼女の艶やかで美しい髪は、学園内の男

子たちを

常に魅惑し続けている。彼女の虜となつた男は数知れない・・・。いけない、また訳の分からぬことを・・・。この癖、なんとかならないかしら。

湯船に浸かり、先程の話題について話す。

「で、どうするの？正体が明らかでない以上、あまり大っぴらに動けないわよ？」

シャンプーを洗い流し、蒲公英も浴槽に入ってきた。この狭さにも慣れ、今では家族の温もりさえ思い出す。蒲公英は、お湯の暖かさを充分に満喫しながら、彼女は答えた。

「・・・生徒会長として、“隠密治安維持部”に正式に依頼するわ。敵の全容を特定するまでの間、渡瀬秋桜の周囲を監視して頂戴。」

「了解。ただ、私は動けないわよ？下校時間までは屋上に監禁されてるし。」

「授業中におかしな真似はできないでしちゃうから、登下校中や休日、休み時間・・・。

とにかく、彼女が一人になる時に周囲を警戒してもらいたいのよ。なるべく生徒たちに顔バレしていない部下、いるかしら・・・？」

「山茶花なんてどうかしら。彼なら、いい仕事をしてくれると思うわ。」

5月9日

昼休み、僕は部長に呼び出された。どうやら、新たな任務らしい。

「今日から数日間、渡瀬秋桜の周囲を監視して。監視の手段は君に一任するわ。」

渡瀬秋桜？なんで彼女が……。いや、同姓同名かも知れない。一応、確認だけはとつておくか……。

「それって、2年A組の渡瀬秋桜ですか？」

「ええ、そうだけど……。よく知ってるわね。」

ああ、やはりそうか。僕は頭を軽く搔きながら事情を説明した。

「僕と同じクラスなんですよ、彼女。しかも、友人です。」

そう言いつと、部長は目を丸くして驚いた。予想外だったようだ。部下のプロフィールぐらい覚えておいて欲しいものだ。

「なら、好都合ね。期待してるわよ。」

「あいあい、了解しました。」

屋上を出て、階段を下りながら、これから流れを想定していく。授業中の監視は問題ない。登下校は何かしらの理由を付けて僕がくつつけば

十分にカバーできるはずだ。

休日は・・・まあ、追追考えよ!。

「おーい、大貫ー！」

「おお、ヤス、どうしたんだ?」

入学してすぐに友人になつた夜須トラヒコが、教室の窓から顔を出して手を振つていた。歩み寄り、何だと尋ねる。

すると、ヤスは財布で僕の腹をポンポンと叩いた。

「お前、昼飯まだだよな?」コンビニに行こうぜ。」

「イイねえ、コンビニ。じゃあ、早速行くとしよう。」

さすが大貫!彼はそう言つて爽やかに笑い、華麗に窓枠を飛び越えた。

「あつ!山茶花くん、待つて!私も行くよッ!」

教室のドアが勢い良く開いたと思つと、中から女の子が飛び出してきた。

桃色の柔らかな髪の毛が、動くたびにサラサラと靡いた。

「よつ、渡瀬。お前もまだなのか?」

「それがね、お弁当を忘れちやつたのさッ!」

彼女が今回の対象、渡瀬秋桜。名前と同じ、コスモスを想わせるピンク色の髪が、

彼女の愛らしさをより一層際立たせた。

大貫山茶花 その2

「いやはや、渡瀬さんはいつも元気だね。僕みたいな根暗にはその明るさは眩しそぎるよ。」

「私はそんな君を照らすためにいるんだよッ！私の愛は太陽よりも輝いているものッ！」

僕と渡瀬さんのやり取りを見ていたヤスは、死んだ魚のよつた目をしていた。

「・・・頼むから、他所でやつてくれ。」

うんざりした表情で、わざと大きく舌打ちをした。

僕たちは上靴のまま校門を出る。これは校則で禁止されているが、これを守っている者は

誰もおらず、教師や生徒会も黙認していた。所謂、暗黙の了解といふやつだ。

学校から徒歩15分程度の場所で営業しているコンビニで、それぞれ弁当を購入した。

僕は添加物たっぷりの若大将弁当、ヤスは豪快な鬼盛り弁当、渡瀬さんは

謎のサプライズ弁当を買った。

コンビニの前に設置されたベンチに座り、僕たちは弁当の蓋を開けた。

「渡瀬、それ何？その、当たり・・・なのか？」

「いやあ・・・、かなり回答に困っちゃうかな・・・。それよか、この内容は

夜須くん的には当たりなのかッ？」

渡瀬さんが買つたサプライズ弁当は、きちんと包装されて中身が見えないようだ。

工夫されており、それがサプライズたる所以らしかった。そして、彼女が引き当てたものは、大盛りの白いはんに、オカズは巨大な厚焼き玉子

だけという、なんともやりきれない内容だった。

「まあ、オイシイか否かで考えるなら、ある意味アタリだよね。」「つたぐ、お前にオチを言われると、悔しくて笑えないぜー！」

談笑もそこそこに昼飯を食べ終わり、僕を残してヤスと渡瀬さんは先に学校へと戻った。

僕はある物を買うため、そこからむかひに5分かけて河川敷へと向かう。

河川敷に着いた僕は土手を下り、橋の下に建てられた汚いプレハブ小屋へと入る。

中には、薄汚れたハットを田深に被つた初老の男性がいた。

「おいおい、また来たのかい？」この前止めるつて言つてたのは誰だつたかな？」
「・・・金なら払います、いいからください。」

僕はポケットの小銭を男性の前に置かれているワックスの空き缶に放り込んだ。

男性はニヤニヤと下品に笑い、木製の小箱から煙草を取り出した。

「まだバレてないのかい？なかなかしぶといなあ。」

煙草を受け取り、制服の内ポケットにいれながら答える。

「・・・ええ、隠れてコソコソ吸つてますから。」

「ククク、そうかい。・・・おひと、やうだ、お得意さんだから教えといでやる。

この煙草なあ、そろそろ仕入れが途切れそんなんだよ。だから、近々値上げも

考へているんだが、今のうちに溜めしとくなら、サービスします

ぜ?」

足下見やがつて・・・!

僕は心中で悪態を吐きながらプレハブ小屋を出た。制服に付いた埃を叩き落とし、携帯電話を開いて時間を確認する。

「一時ちよい過ぎ、か・・・。」これは、次の授業には間に合わないかなあ。

まあ、いいか・・・部長より不良かもね・・・。」

自嘲気味に笑いながら、煙草をくわえ、オイルライターで火を点けた。

「へいへい、二口中野郎かよッ！」

聞き慣れた声がした。恐る恐る振り返ると、土手の上に渡瀬さんが笑みを浮かべて仁王立ちしていた。え、マジですか・・・？

「ゲホッ、ゲホッ！ わ、渡瀬さん！？ なんでここにー？」

「時間割の変更を伝えに来たのさッ。次は臨時の全校集会だよッ。」

ザザザッと土手を滑り降りてきた彼女は、依然として笑い続ける。

僕は睡然として歩いてくる彼女を見つめることしかできなかつた。ヤバイところを見られた、嫌な予感しかしない・・・！

「まさか、山茶花くんがまだ二口中野郎だつたとはね、驚きだよッ。私はてっきり、もう足を洗つたものと思つてたんだけどなッ。」

僕と彼女の距離が1メートルを切つた時、突如彼女の顔から笑みが

消えた。

腐った物を見るような目で見ながら、制服の上から煙草を握り潰した。

「3人で約束したよね、もう煙草は止めるつて……。

夜須くんはきつぱり止めたつて言つてたよ？もう吸いたいとも思わないつて。

山茶花くん、言い訳はしなくていいの？もしかしたら、何かの間違いで許してあげるかも知れないよ？」

言い訳？できるわけないでしょ……。

僕は覚悟を決めて首を横に振った。一瞬、彼女が笑ったように見えた。だが、僕がそれを認識するより先に、彼女の拳が僕の腹にめり込んでいた。

「・・・「ううッ！」

目の前で星が散った。比喩ではなく、本当にチカチカしていた。内臓がざわざわと騒いでいる。呼吸ができなくなり、全身の力が抜ける。

「安らかに・・・。

渡瀬さんが何やら物騒なことを言つた気がしたが、僕の意識は朦朧としていて、次の瞬間には視界がブラックアウトしていた。

ああ、なんか、とっても清々しい気分だ・・・。

僕はどこまでも広がる麦畑を歩いていた。
縁もゆかりも無い場所だったが、何故だか居心地は良かつた。
何かを忘れているような気もするが、別にいいだろう。
さて、麦畑の果てを探しに行こうか・・・。

「山茶花くん、起床時間だよッ！」

空から聞こえた声によつて、ふわふわとしていた感覚が一気に現実
へと
引き戻された。暗黒だった視界が急に切り替わり、目の前がチカチ
カしていたが、

徐々に慣れていき、渡瀬さんが僕を見下ろしていることに気付いた。
頭の下が異様に柔らかい、まるで太もものような・・・。
ふと触つてみると、限りなく皮膚に近い質感だつた。ああ、これは
太ももだ。

「同級生の膝枕つて、とんだラブコメ展開だな・・・。」

「おはよう、山茶花くん。痛かつたよね・・・。でも、私が怒つた
理由は
分かつてくれるよね？だから、私、謝らないから。」

今にも泣きそうな渡瀬さんが、僕の頭を撫でながら言つ。
以前に3人で交わした約束・・・。忘れていた訳じやなかつたが、
僕はどうしても誘惑に勝てなかつた。

「ごめん、もう渡瀬さんを悲しませないつて決めたのに・・・。
これは、ヤスにもぶん殴られないといけないな、ハハ・・・。」

渡瀬さんが優しく微笑んだ。そして、僕の頬をゆっくりと撫でた。彼女の唇が小さく動いた。え、今なんて・・・？これを聞いてしまつと、何がまづいことになるような気がしたが、僕は何を言つたのか尋ねずにはいられなかつた。

「渡瀬さん、もう一回言つてくれないかな？」
「・・・好き。付き合つて？」

予想通りといふか予想外といふか、僕の顔は似合わず熱くなつた。

渡瀬さんの頬も赤く染まつてゐる。またか、ラブロマンスつてやつた。「いや、でも、ヤスが怒るんぢやないかな？あいつ、渡瀬さんに氣がある

よつた感じだし、今の関係が壊れるのは・・・！」

僕が慌てると、彼女はきょとんとした顔をした。

「夜須くん、彼女いるよ？3組のマイちゃんと付き合つてゐるんだつて。」

「え、嘘だろ？あの、美人なのに氣難しさから誰も寄り付かないことで有名な

3組の如月マイが彼女つて、どんな抜け駆けだよ・・・。」

思わず笑つてしまつた。あいつ、僕ぐらいには言つとけつての。

渡瀬さんの手はまだ僕の頬を触つてゐる。僕は、その手に自分の手を重ねた。

僕の行動に、彼女はまた泣きそつた顔になつた。今度は悲しさからじやなく、

嬢ちゃんのものだね、なんとなくだが、そんな気がした。

そういえば、ここはなんだろう。見た感じは誰かの部屋みたいな・・・。

それにしても、えらくファンシーな部屋だな。

「ここでもしかして、渡瀬さんの部屋？」

「やうだよ。あの河川敷から近かつたから、休ませよ」と黙つて。

なるほど、こことか。部屋の時計を見ると、既に8時を回つている。

もうそんな時間か、そろそろ帰らないと。

「じゃあ、僕はそろそろ帰らつかな。もう遅いしね。」

そう言つと、渡瀬さんは物凄い力で僕の体をベッドに押さえ付けた。目が血走つているような氣もする。

「ダメよ、山茶花くん！私の手料理を・・・、じゃなくて、まだダメージが抜けてないと思つから、もう少し休んでいい！」

今、本音出でましたけど？まあ、こうのも偶にはいいかもな。渡瀬さんは料理を作るために下へ降りていつた。

しばらく休んでいいと決めるが、携帯電話の着信音が鳴り響く。しかも、これは特定の相手でしか鳴らないものだった。

「なんてタイミングの悪い・・・。靈でも憑いてんのか？」

ディスプレイに表示された相手の名前を見て、思わず眉間にしわが

寄つた。

彼から電話が掛かってきて良いことがあつた試しがない。

「“侘助”……、お前つて奴はどこまで疫病神なんだ……？」

もちろん、懸密治安維持部の仕事だらう、断るわけにはいかない。深い溜め息を吐きながら通話ボタンを押した。

「おう、出るのが遅えんだよ、山茶花。まあ、それはいい。テメエ今どこにいんだよ、家に居ないのは分かつてるぞ？」

「はあ、お前は僕の母親か？ いちいち僕が出掛ける場所を言わなければいけないのか？ 過保護にも程があるぞ。」

普段はあまり言つことのない文句を言つと、侘助は相当苛立つて言ひ返すこともなく要件だけを簡潔に伝えてきた。

「山茶花、緊急事態だ。どうやら敵に先手を打たれたらしい。詳しいことは“月神”^{つきがみ}に聞かなければ分からんが、さつさとテメエを連れて来いとの仰せだ。で、テメエ今どこにいる？」

なるほど、確かに緊急事態らしい。僕は侘助に少し待つとうに言つた後、

渡瀬さんに事情を伝え、近所の田印になるよつな場所を聞いた。

「えつと、確か近所に〇〇公園つていうのがあるんだけど……、山茶花くん、本当に大丈夫？ まだ少し休んでたほうが……。」「いや、もう大丈夫だよ。友人が危篤状態らしくてね、急がないと。……侘助、〇〇公園だ。そこで落ち合おう。僕もすぐに向かう。」

異常に粘る渡瀬さんをなんとか説得し、公園へとやつて来たが、どうやら侘助はまだ来ていないうらしい。僕は内ポケットに入ったタバコに手を伸ばした。

「つーと、もう「コ」とは縁を切ることにするか。もう、死にかけるのは「めんだ。」

人生一度目の禁煙宣言だ、僕はタバコとオイルライターを「ミニ箱に放り込んだ。

すると、聞きなれたバイクの音が聞こえてきた。

公園の入口に大型バイクが停まり、ライダーがメットを脱ぐ。乗っていたのは、金髪のオールバックで左目に傷のある男だ。どこからどう見ても柄の悪いチンピラだが、彼は歴とした高校生だ。僕と同じ黒蜜学園の生徒、“風嵐侘助”である。

「俺より早く着いてたってことは褒めてやる。だが、女の自宅にしけこんでやがったのは許せねえ。今度、学食のジャンボパフェ奢れや。」

「そんなことより、早く行かないと月神女史に怒られるぞ?」

僕の言葉でそのことを思い出したのか、侘助は慌ててメットを被りながら僕に後ろに乗るよう促した。

「テメエ、後で覚えてやがれ・・・。」

「はいはい、さつさと行ってくれえつーー!」

僕が言い終わる前に急発進しやがった！舌を噛み切るところだつた。違法に改造を施したバイクはどんどん速度を上げていき、あつと言ふ間に

法定速度をオーバーしてしまった。ヤバイ、お、落ちる!!

「テメエこの無駄話して遅くなつたから急いでんだよ！まだまた上げていいくぜ！」

それに、俺のテクニツクなら問題ねえよ！」

そういう問題じゃないんだよ、侘助。お前の後ろにいる僕が今にも振り落とされそなんだ。分かってくれ。

たか 僕の願いは彼に届かなかつたよ。た
佐助か力一木アケセ川
を捻つたのだ。

必死に雨の緑にた結果、僕は無事に学園はた
り着けた。

一般生徒は出入りを禁じられている裏門から校内に入り、駐輪場にバイクを停める。

「はあ、はあ、侘助……、覚えてるよ……？」

「ああ？ 何を覚えとけって？ テメエに奢つてもらひヅヤンボバフエのことなら、

死んでも忘れねえから安心しろつて！ハハハ！」

僕の背中を叩きながら高らかに笑う侘助を見て、僕は溜息を吐いた。

？
この女を三懃にしなくて
“月夜”女史はどんな三懃を傳
かんか

今日はいつもと空氣が違つたから、嫌な予感はしていた。予感だけで済んでいたのなら、杞憂だったと笑いながら自宅で酒を呑みながらバラエティ番組を見ていられたのに。

「まつたく、私つてば、なんてツイてないのかしら……。」

私はケータイを取り出し、飼い犬に電話を掛ける。

飼い犬は2コールで電話に出た。さすが、我ながら見事な躊躇だわ。

「侘助君、すぐにメンバーに招集かけてくれる？ 部長には私が連絡するわ。

山茶花君は家が遠いから、貴方が回収して頂戴。」

「ちつ、分かったよ。とりあえず、“崩焰寺”と“天骸”に連絡するや、

後はアイツらが適当に主要メンバー集めんだろ。それでいいか？」

さすがは“スクエア”的リーダーね。素晴らしい判断力だわ。

「ええ、それで構わないわ。それじゃあ、お願ひね。

・・・ああ、そういう！ 犬はワンコールで出ないといけないわよ？」

私が冗談でそう付け加えると、つるせえ！ と怒鳴られて通話を切られた。

もう、怒りっぽいんだから。もう少し躊躇が必要かしらね。そんなことを考えながら、続けて電話を掛けた。

「もしもし、姫咲です。」

「ああ、もしもし、月神ですけど。部長、悪いんだけど、今すぐ会長と一緒に学校まで出て来られないかしら？事情は学校で伝えるから。

出来るだけ早く来てくれる助かるわ。それじゃ、よろしくね。」

早口にそつこね、通話を勝手に終える。何か言つたような気もするが、どの道彼女に拒否権はない。部活において“顧問の”命令は絶対なのだ。持っていたタバコの吸殻を携帯灰皿に放り込み、新しいタバコをくわえる。

「しかし、よくもまあ、こんなけつたいたいことが出来るもんだわ。教師としては、うちの生徒がやつたとは想いたくないんだけどなあ・・・。」

吹き付ける風でガスライターの火が消えないように手で風を遮りながら、タバコに火を点ける。

「これは、嵐が来るかもね・・・。」

屋上の地面を見つめながら、私はタバコの煙を吐き出した。

電話を掛けてから10分程たつた頃、ようやく最初の待ち人が現れた。

「さすが、家が近いと來るのも早いわねえ。」

現れたのはロングヘアで目付きの悪い美少女と、いかにも小さく手を振る

ツインテールの可愛らしい少女だった。

目付きの悪い少女は3年生の“天骸百合”、かつては剣道部が誇るエースだったが、私が裏工作を行なつて引き抜いた女生徒だ。もう一人のツインテールの少女は同じく3年の“崩焰寺鈴蘭”。

彼女は隠密治安維持部であると同時に、陸上部のキャプテンでもある。

私は冗談で「一本ビリ」と言ひながらタバコを差し出しだが、百合は黙つて首を

振つて拒否した。相変わらず、無口な子だ。

一方、それとは逆に鈴蘭は愛らしい笑みを浮かべながら人差し指でペケを作つた。

「あー、いけないのですよ、先生！生徒に喫煙なんて勧めちゃダメなのです！」

百合ちゃんが不良になつちゃつたら、先生のこと殺つりやいますよ

〜？

いつも相変わらず、とんでもないロリボイスね。

電話越しだと小学校低学年に間違われるつて噂、本当のかも・・・

「冗談よ、冗談。お願いだから殺つちゃわないでくれる? で、本題なんだけど……、
つて、もう見れば分かるわよね?」

私の問いに、二人は無言で肯いた。先程とは打って変わって、鈴蘭も真面目な表情だ。

余程“コレ”が衝撃的だったのだろう、かく言つ私も、“コレ”を発見したときは

思わずくわえていたタバコを落としてしまったほどだ。
今までに無い事態に困惑する一人を落ち着かせるため、一度間を置くことにした。

「まあ、もう少し待てば他のメンバーも呑流するでしょう。細かいことは

それからこじましょ、ね? あ、そうだ、“富流璃”はどうしたの?
あの子にも招集かけてくれたんでしょ?」

「ああ、“瞿麦”^{なでこい}ちゃんはダメですよ。あの子、侘助ちゃんの言つことしか聞かないじゃないですか。」

そう言えば、富流璃が彼以外と話してゐたこと無いわね。迂闊だったわ。

後で侘助君から伝えておいてもらわないといけないわね。
「あの子は……、やつぱり、何でもない……。」

珍しく百合が口を開いたと思つたら、何か言いかけて再び黙つてしまつた。

まあ、彼女が何を言つたかはだいたい予想がつくけど、
それはまた今度にしましようか。

続いてやつて来たのは、部長の姫咲向日葵と生徒会長の法条蒲公英だった。

「月神先生、一体何の用事ですか？」この前みたいなくだらない仕事なら帰りますよ？」

「あら、子供の世話だつて立派な仕事よ？ いつかは貴女も子を持つんだから、

今 のうちに 予行演習しておくれのも悪くないんぢやないかしら？」

私がそう言つてからかうと、部長は顔を真つ赤にして俯いた。
あの子、いつもは取つ付きにくに雰囲気を醸し出しているけど、女の子っぽい話題、
お嫁さんとか、あの辺の話には極端に弱いのよねえ。實に可愛らじいぢやない。

「先生、そろそろ本題に入りませんか？ 私たちも暇ではありません
確かに部活も大事ですが、学生の本分は学業とこいつとを忘れては
いませんか？」

この流れ、非常に面倒臭いことになりかねない。彼女が一度説教を
始めると、
小一時間は終わらないのだ。

「そもそも、先生は毎度毎度勝手過ぎます。」ひいの都會とこいつも
のも

少しは考えてください。・・・ちょっと、先生、聞いてますか？」

「言わぬくともちやんと聞いてるつてば。以後気を付けるから勘

弁して。

それより、貴女たちを呼んだ理由だけど、コレよ。」

説教の軸を強引にすらじ、まだ何か言いたそうな会長を黙らせる。部長は既に気付いていたようで、問題のモノを見つめて考え込んでいた。

コレを見て物怖じしないなんて、流石は閻鬼連の四天王ね。

「私たちへの“宣戦布告”ってことでいいのかしらね、コレって。ふう・・・、侘助が見たら、怒り狂って生徒全員ぶちのめすんじゃない？」

「冗談ぽく聞こえるが、実際あの男は過去に似たようなことを為出かしている。

まあ、今更昔のことを蒸し返すつもりも無いが、常に最悪のケースとこうものを想定しておかなければならぬ。

「・・・今回の件、侘助君には他言無用とするわ。彼には、宮流璃と一緒に

情報収集に徹してもらうことにする。」

「彼の性格を考えれば、当然の指示ですね。ですが、この件をどう説明する

つもりですか？隠していたことがバレたら余計に面倒では？」

会長が顎を触りながら言った。相手を肯定しつつも遠まわしに反対意見をぶつけてくる、素晴らしい話術だわ。

「まあ、その辺は考えてないわ。そこは貴女たちの腕の見せ所じゃ

ないの？

とにかく、山茶花瓶を降ろしたらすぐここに富流璃の所に向かつよう云
えて。」

「またそんな無責任を……。」

会長が呆れながら文句を言おうとしたが、鈴蘭が間に入って彼女を宥めた。

百合は既にこの場から消えていた。おそらく、コレを処理する準備をしに行つた

に違いない。無口ではあるが、気配り上手だなど、改めて感心した。部長も侘助君に連絡を取つていた。どうやら、もうここに到着しているらしく、

ケータイから彼の喚き声が微かに漏れていた。

「ええ、ええ……、分かったわ、これから気を付ける。」

困つたような表情を浮かべてケータイを仕舞つた部長に、何を言われたのか

尋ねると、微苦笑しながら答えた。

「『俺はハウンドの部員でテメエは部長だ、一応命令には従つてやる。だが、俺の飼い主はあくまで月神だ。いいか、それだけは覚えておけ、クソッタレ。』

・・・だそうです。年下にあくまで言われたのは初めてです。」

そんなことをいつとは、思いもしなかったわ。まったく、私に懷いてるのか

そうじやないのか、よく分からぬ飼い犬だこと……。

無性に彼が可愛く思えて、今度テートでもしてやろうかなと、半分

「冗談で、

だけど半分は本気でそんなことを考えた。

「遅ればせながら、只今馳せ参じましたよ。一体何があつたんですか？」

急いで階段を駆け上がってきたのか、やや息の上がった山茶花君が現れた。

ひとまず状況を簡単に説明し、問題のモノを見せてみる。

彼は目を細めてしまふソレを見つめた後、軽く息を吐いた。

「これはまた、えらく大袈裟なペインティングですねえ。こんな大掛かりな

作業、多分一人じゃ無理ですね。複数人の仕業じゃないですか？」

「良い推測だわ、山茶花君。その通りよ、ご明察。実はね、最近この学園の

体制を疑問視する生徒がちらほらと現れているのよ。ねえ、会長？」

山茶花君を褒め称え、後方に立つ会長に質問した。もちろん、回答は分かりきっていた。予想通り、会長は少し間を置いてイエスと答えた。

「ええ、そうですね、その通りです……。自分たちと同じぐらいの年の

女子が、学園を事実上支配しているといつ構図が気に入らないようですね。

私を引きずり下ろそうと画策してゐて噂もあります……。」

会長は腕を組みながら、静かに話し始めた。

「初めは素晴らしい政治をしていても、人はいずれ権力に溺れる・・・。

彼らは彼らなりに、学園の将来を案じているんだと思います。情けない話です、

本来なら生徒から信頼されなければならない人間が、生徒を不安がらせている

なんて、生徒会長失格です・・・。」

言いながら肩を落とす会長を、鈴蘭が慌ててフオローした。

「そんな、蒲公英ちゃんが凄く頑張っていることは、私たちが一番知っていますよ！」

学園のみんなもそれは理解しています！一部の革命家気取りなんか気にしてちゃ

身が持ちませんよー？自信持つて下さー！」

鈴蘭が落ち込む会長の肩を物凄い力で揺すった。会長の頭がカクカクと力無く揺れる。

「そ、それでも、反対勢力を抑えきれなかつた結果が、今こうして、出でているわ。

そのせいで、ハウンドにも迷惑が、掛かっている・・・もういいから！」

しばらく揺すられつつも話し続けていたが、余りにも長かったのだ

るつ。

普段はあまり出さない大声を出して鈴蘭を押しのけた。

「とにかく、今はコレをやつた奴らを呪のし上げるのが先決よ。このまま

舐められっぱなしつてのも、胸糞悪いじゃない？」

鉄柵にもたれ掛かつてやり取りを眺めていた部長が、不敵な笑みを浮かべながら

集まつたメンバーに向けて言い放つた。まあ、このまま見過しきるんてことは

有り得ない話だけどね。他のメンバーも力強く肯いた。元々血の気の多い者たちが

集まつた部活だ、ここまでやられて引き下がるような腰抜けはビックリもない。

何時の間に戻ってきたのか、手にバケツとモップを持った百合がドアの前に立つて何度も肯いている。

「さあて、久しぶりの大仕事よー超弩級の戦争を始めましょーかー・・・つと、

その前に、まずはコレを消さないとね。校則第三条、学園は清潔に！」

全員が掃除用具を取りに下へと降りる中、私は一人残つてもう一度ソレを目に焼き付けるために見つめた。タバコに火を点け、紫煙をくゆりす。

吐き出した煙は、吹き抜ける風ですぐに消えた。

「『革命の時は来た』、か・・・。」

地面上には、ペンキでべつたりとその言葉が書かれていた。再び強い風が吹いた。

その時、私の中にある疑問が浮かんだ。

「・・・部長、山茶花君、鈴蘭、百合。会長は違うし、侘助君と富流璃は来てない。

あれ、ハウンドの主要メンバーって、こんなに少なかつたっけ？」

用事か何かで来られなかつただけだらう。そう思った。だが、そうではなかつた。

他のメンバーが謎の人物の襲撃を受けて病院送りになつた事実を、翌日聞かされた。

5月1-1日

俺は愛用のバイクに跨り、行く宛もなく気ままに走り回っていた。特に理由なんてものはない。強いて言つなら、暇だからだ。

市内をしばらく走った後、ガソリンを給油するためにガソリンスタンドに

立ち寄った。給油をしている間、自販機で缶コーヒーを買おうとしたが、

俺が愛飲している微糖のコーヒーが売り切れていた。

「チツ・・・・、しょうがねえ、あまり好きじゃねえが、ブラックを・・・。」

ブラックのボタンを押そうとするが、こちらも売り切れた。おいおい、

「冗談じやねえぞ、どうなつてやがんだ、こここの自販機はよお！？頭に血が上り、店員を怒鳴り散らしそうになるが、なんとか堪える。いやいや、こんなことでいちいちブチギレちゃあ、クールじゃねえ・・・。

軽くこめかみを押さえ、落ち着きを取り戻す。飲み物は諦めよつ、自販機なんて

このじ時世、どこにでもある。給油が終わつたらしいバイクの下に戻り、店員に料金を支払つてさつさと出発する。

行き先は同僚の富流璃の自宅だ。飛ばせば5分もかかるない。富流璃の家には何故か

大量に微糖のコーヒーとパフェの材料が備蓄されており、よくお世

話になつてゐる。

因みに、パフュ^ムは富流璃が作つてくれる。そして、今日は何パフュ^ムを戴^つこ^うつか・・・。

逸る気持ちを抑えきれず、ついついアクセルを捻る手に力が籠もる。あれやこれやと考へてゐるうちに、俺は富流璃の自宅に到着した。見た目は普通の一階建ての一軒家。ガレージも完備しているが、中は空っぽだ。

俺は勝手にバイクを停め、呼鈴も押さずに中に入る。一階からは人の気配はしない。

それは相変わらずだった。わいつと一階に上がり、階段に一番近いドアを開ける。

「よひ、調子はどうだ？」

言いながら部屋に足を踏み入れる。窓のカーテンは取り外され、代わりに板が張られ、完全に外界からの光を遮つていた。部屋の光源はパソコンのディスプレイのみで、なんとも頼りないものだ。そのパソコンの前には目が隠れるほど前髪が長い黒髪の少女が座つていた。この家の家主、^{くわつねやこ}“富流璃麗美”だ。部屋に置かれた冷蔵庫を開けると、中では大量の缶コーヒーが冷やされていた。

因みに富流璃はコーヒーが飲めない、簡単に言えれば、この冷蔵庫は俺専用だ。

缶を一本取り出し、蓋を開けて口に運んだ。つむ、やはり微糖に限る・・・！

俺の問いに、宮流璃は何も答えなかつた。いや、正確には、何も言わなかつただけだ。

彼女が見つめるものとは別のモニターに、『まづまづ。』と表示された。

「そうか・・・。」いつも大した成果は上がつてねえ。午前中に襲われた連中を訪ねてみたが、どいつもこいつも分からないとしか言いやがらねえ。まったく、俺らに喧嘩売ろうなんざ、犯人は余程死にてえらしいな。」

1本目のコーヒーを飲み干し、2本目に手を伸ばす。

『襲撃を受けた部員は7人、場所はいずれも人通りの少ない路地。目撃者無し。』

新たに表示された文字を見て、俺は溜息を吐いた。あまり状況は芳しくないが、まだ打つ手が無くなつたわけではない。宮流璃の頭に手を置き、耳打ちするように呟いた。

『病院に向かうついでに、襲撃現場を一通り見てきた。全部といつ訳じやないが、防犯カメラも在つた。そこでだ、お前に頼みたいのは・・・。』
『カメラの映像?』

俺が言う前に文字が表示された。よく分かつてゐるじゃねえか。

「そう、映像だ。すでに消去されていれば手詰まりだが、映像が残されていれば、

あつと言つ間にチェックメイトだ。俺たちはキングを包囲できる。『クラシキングなら可能。でも、データが残されている可能性は低い。』

「まあ、とにかく一度やつてみてくれ。お前だけが頼りなんだ。」

俺がそう言つと、宮流璃は少し考へた後、キーボードを叩き始めた。どうやら彼女も

事前に調査してたらしく、カメラが設置されていた現場がリストアップされていた。

複数のサーバーが唸りを上げ、見たことのないソフトウェアがいくつも起動していく。

似たような場面には何回も居合させたことがあるが、いつ見ても壮观だ。

見ていて分かるわけでも無いし、何か手伝える訳でも無い。俺は部屋の外に出て、

一階に降りた。風呂やキッチンといった場所以外には、生活感がまるで無い。所見だと

空家と間違えられるかも知れない。それほどまでに、宮流璃は、およそ女子高生には

程遠い生活を送っていた。

俺も柄にもなくこの生活を改善してやるつと色々頑張つてみたが、無理だった。

いつも、あと少しとこりひりひで彼女は諦めてしまつ。慌てて部屋に戻つてパソコンと

にらめっこを始めてしまつのだ。まさかあそこまで酷いとは思わなかつた。

さすがの俺もお手上げ、すぐに降参した。その代わり、ちゅくちゅく

く彼女の家に顔を

出すようにした。人生に絶望して自殺していないか、確認するためだ。

今のところ、まだ大丈夫だ。

ガレージに向かい、バイクを眺める。月神と契約を交わした数日後、俺の家に

月神が持ってきた代物だ。何かの悪巧みかと問い合わせると、奴は満面の笑みで

こう言いやがつた。

『タダであげるのよ。もちろん新品。どじも弄つてないから、貴方の好きになさい。』

その代わり、学校にはきちんと来なさい。授業も真面目に受けて、テストでは私の

納得がいく点数を探りなさい。いいわね?』

『お前は俺の母親か?』

立ち去る月神の背に、俺が反抗的に言い放つと、月神は振り向かず答えた。

『母親じゃなくて、母親代わりよ。』

売り捌いて遊ぶ金に変えることも出来たが、俺はそれをしなかつた。学校に行き授業を受け、試験はいつも80点以上。まさに優等生つて奴だ。

休日は家でマニアル片手にバイクを弄つて過ごす。趣味なんて言うつもりは無いが、油まみれになつた自分の姿は、かつて夢に見た普通の高校生そのものだつた。

『いや、普通の高校生には程遠いか・・・?』

苦笑しながら当時を振り返る。今思えば、月神に上手く乗せられた
いたような気が
しないでもないが・・・、まあ、それでもいいじゃねえか。
時計を見ると、何時の間にか30分以上経っていた。おっと、そろ
そろ頃合だな。

再び富流璃の自室に戻ると、彼女は作業を終えて一息吐いていた。

「どうだつた？」

『一つだけ、映像が保存されていた。解像度は悪いけど、襲撃の一
部始終が完全に
録画されてた。既にコピーも終了している。』

文字が表示され、富流璃がこちらを向いた。指示を出せ、そつ言
ているように
見えたから、俺は映像の再生を促した。彼女は首を、キーボードを
叩いた。

映像ソフトが立ち上がり、カメラの映像が再生される。
かなり薄暗いが、街灯の光のおかげでなんとか見ることが出来る。
映像は襲撃された部員が立っているシーンから始まっていた。

「これはお前が事前に編集してるので？」

『違う。カメラが動体を認識した瞬間から録画がスタートする仕様。

』

「ああ、なるほど。良いカメラ使つてんじゃねえか。

映像はしばらく部員が誰かと電話するシーンが続いていた。何だ、
誰と電話を
してやがるんだ・・・。

疑問に思つたその時、カメラの死角から手が伸びて部員を影に引き

すり込んだ。

音声がないため、何が行われているのか検討が付かない。

「おい、これで終わりじゃねえよな？」

終わりなら、打つ手無しだ。だが、宮流璃は首を横に降つて否定した。

直後、パークーを着てフードを被つた大柄の人物が画面を横切った。

チツ、やつぱり顔は映つてねえか・・・。だが、こんだけ『テケ』図体してりやあ、

探し出すのはそつ面倒なことじやないはずだ。

「・・・ん? このパークー、どうかで見たような・・・。おい、口イツの背中を

拡大することひて出来るか?」

俺の質問に、富流璃は首を振つた。

『それは出来ない。この映像はあくまで『ペリーだから。』

「そりか・・・。まあ、それなら仕方ねえな。ここから先は、俺の独断じや動けねえ。」

月神の指示を待つしかなさそうだ。お前の仕事はひとまず終つた、お疲れさん。」

労いながら富流璃の頭を撫でると、じわりを向いて嬉しそうに微笑んだ。

こつやつて感情が表に出でてへるよつこなつただけでも、随分な進歩じゃないか。

「さて、俺はこのことを月神に報告してくる。ついでに今後の動きについての確認も

しなきやなうねえな。お前はのんびりやつてつやいい。じゃあな

そつ言つて立ち去つとすると、富流璃が服の裾を引っ張つた。振り返ると、手には

いつ出したのか分からぬ缶コーヒーとディスクが握られていた。

『一応、さつきの映像をディスクにコピーした。あと、コーヒー。』

「……ありがとよ。』

それらを受け取り、部屋を後にする。家を出て、俺はそれを飲んだ。長い時間握っていたのだろう、中身は温くなっていた。

「……なんだ、温いのもなかなかイケるじゃねえか。』

全て飲み干し、空き缶を道路の隅に投げ捨てる。電話を取り出し、月神に掛ける。

「はい、もしもし。どうしたの？』

「富流璃が犯人の映った映像を手に入れた。とりあえずアンタにもそれを

見てもらいたいんだが、今から大丈夫か？』

出来るだけ物腰柔らかに話すと、電話の向こうから含み笑いのような声が聞こえた。

「ちょっと、今日はえらく大人しいじゃない？お腹でも壊した？」「うるせえ！おかげをまでいつもどおりの不機嫌になりました、どうもありがとうございました！」

「あはは、ごめんごめん。そりゃ、もつ予定もないし、大丈夫よ。

じゃあ、私の家に来て頂戴。ついでに晩ご飯でも作ってあげるわ。』

晩飯はいらないが、とりあえず了解だ。俺は分かつたと短く答え、電話を切った。

バイクに跨り、月神の住むマンションに向かって走り始めた。
つていうか、あいつ料理なんか出来んのか？

5月1-2日

今日は待ちに待つた休日です。何をしようかな。散策ついでにショッピングもいいし、百合ひやんを誘つて食べ歩きつてのもアリだなあ。

「……と、私は色々と考えていた訳なのですよ、先生。なのに、先生は貴重な休日を潰してまで働けって言つんですか？あれ、先生って鬼畜ですか？『悪いとは思つてゐて。仕方ないじゃない、せっかく富流璃が危ない橋渡つて情報を手に入れてくれたんだから、それに答えないど。』

まあ、言つてることは正しいです。まさに正論です。ですがねえ、こちとら花の女子高生な訳ですよ。巷で流行りの「くつて奴ですよ。珍しく陸上部の練習も休みで、久しぶりに羽を伸ばせると思つてたのに……」

「断固拒否します！他に動ける人は山ほど居るはずです！」

私が力強く言つと、先生はしばらく黙つてからこう提案した。

「……じゃあ、こつしましょ。駅前に出来たばかりの新しいラーメン屋、あそこで一番高いやつを奢るわ。それで手を打つてくれない？」

それを聞いた私は、一瞬呼吸の仕方を忘れてしまった。慌てて深呼

吸をして、

落ち着いたとする。

ま、まさか、いつ行つても行列が半端じやなく途中リタイアする者が続出している

あのラーメン屋！？いや、先生は私の根負けを狙つて提案しているんだ。

その手には乗りませんよ！

「・・・ま、またまた、そんなこと言つて。私は騙されませんよ？私のリタイアを

狙つてるんですね？先生もせいい手を使いますねえ。」

「・・・実は、私つて、あの店の主人とは面識があるのよね・・・。

。

え・・・！？

言葉に詰まる。先生はその動搖を見逃さなかつた。畳み掛けるように続ける。

「しかも、彼は私に貸しがあるからね、私が頼めば一日貸切かつ食べ放題・・・、

なんてことも有利得るかも知れないわね。」

不敵にほくそ笑む先生の姿が容易に想像できた。非常に腹立たしいが、

私は折れてしまつた。折れるしかなかつた。

「はあ・・・、分かりました。働きます、働けばいいんですよね。

それで？

私はいつたい何をすればいいんですか？」

嫌々ながらも承諾すると、先生は嬉しそうに指示を出してきた。要

件は

簡単だった。入院中の部員に対する事情聴取。

「あれ、でも、それは侘助ちゃんがしたんじゃないですか？」

「侘助君はあんな顔だからね、皆がビビって何も話せないのよね。そろそろ落ち着いてきた頃だと思つから、念のためにもう一度つてね。」

なるほど、そういうことならおれの御用だ。ここからなら病院も近いし。

そう思い了承すると、先生は早口に後まよひしへと黙つて電話を切つた。

ケータイを折畳み、机に置く。私は思わず溜息を吐いた。まあ、了承しちゃつたものは

しうがないな。私は立ち上がり、出掛ける支度を始めた。

ベージュのハーフパンツを履き、ピンクのポロシャツを着る。鞄にケータイや財布を

放り込み、麦わら帽子を被つて私は外に出た。うーん、いい天氣だ！路地を通つて近道をする手もあつたが、私は敢えて遠回りになる大通りに

向かつて進み始めた。だつて、こんなに素敵な天氣なんだもの。満喫しなきや！

通学路を進み、大通りに出る。休日といふこともあつてか、人が多い。

人混みを華麗にかわしながら進んでいくと、街で一番大きな総合病院が姿を現した。

病室は予め聞いていたから、私は中に入つてから真っ直ぐ4階に向かつた。

「403、403……、ああ、ここか。」

扉を開けると、病室は4人部屋で、中に居たのは見知つた顔ばかりだつた。

どうやら、部員がまとめてこの病室に放り込まれてゐるらしい。3年生の部員の一人、石神コタロウが私に気付き、声を掛けてきた。

「よう、鈴蘭じゃないか。どうしたんだ、今日は休みだろ？」

「鬼顧間にその休日を潰されちゃつたんですよ。まあ、その原因を作つたのが

「タロウちゃんたちといつ訳で……。わあ、詳しく述べてもらいましょうか？」

軽く毒を吐くと、病室の4人が全員笑った。

「ハハハッ！ ああ、全くその通りだ、情けないことにな。ちょうどいい、さつきまで

俺たちの方でも状況を整理していたところだ。聞いて行け。」

ベッドのそばに置いてあったパイプ椅子に座るよう促され、私は席に着いた。

コタロウちゃんはメモ用紙を取り出し、話を始めた。

「さて、と……。まず最初に犯人だが、全員違う人間だ。それは襲撃された時刻

から考えてほぼ間違いないはずだ。おそらくは組織的な犯行だらうな。」

「それは分かつてる。会長さんに心当たりがあるらしいですよ。それよりも

聞きたいのは、どうしてあなたたちはノコノコとあんな人通りの少ない場所に出向いたんですか？ 何か理由があるんでしょう？」

私が尋ねると、しばらく黙つてからいつ切り出した。

「……なあ、鈴蘭。学園内で俺たちの存在を知っているのは何人だと思つ？」

そりやあ、噂程度なら誰だつて聞いたことはあるだろつさ。だが、ハウンドの実在と

その存在理由を知つているにはいく僅かだ。何故なら、俺たちは日

陰者だからだ。」

日陰者。そう聞いたとき、私はハッとした。確かに、ハウンドは通常なら有り得ない存在であり、私たちは普通の学生からは逸脱した領域に居るのだ。私が当たり前だと思っていた日常は、よくよく考えれば非日常だ。異常な世界に身を置き続けたために私の感覚は何時の間にかおかしくなつてしまつてしまつていた。

「タロウちやんの話はまだ終わらない。

「だが、今回の件はハウンドのメンバーを標的にしている。俺たちですらメンバーの全容を把握しきれていないのに、どうして敵は俺たちをピンポイントで狙えたんだ？」

ハウンドの誰かが情報を流してるので考へるのが、まあ道理だよな。さて、じゃあ誰がそんなことをしたんだ？ 化け物みたいな連中をわざわざ敵に回して、何のメリットがある？ 鈴蘭、お前分かるか？」

私は言葉に詰まった。彼が何を言おうとしているのか、理解できないのだ。

「・・・私に分かるわけないでしょう。なら、あなたは分かるんですか？」

逆に問うと、彼は間髪入れずに分からん、と答えた。思わず椅子から落ちそうになる。

私が椅子に座り直していくと、「タロウちやんが言った。

「まあ、無駄話はさて置きだ。俺たちはあの晩、部員からの連絡で学園に向かった。

連絡を寄せた部員が誰かは分からなかつたが、ハウンドの緊急招集と言われば、行かないわけにもいかんだ奴いつ。で、俺たち皆この様だ。」

「つまり、何が言いたいんですか？回りくどい男は嫌いなんですか？」

遠回しな発言に対して嫌味を言つと、彼は真面目な顔で言つた。

「……近いうちに、お前を含めた他の奴らも襲撃を受けるはずだ。
まあ、いらん心配
だとは思うが、用心しておけ。特に侘助だ。あいつは何だかんだで
この近辺じゃあ一番
有名な奴だ。去年、派手にやらかしてるからな……とにかく、
しばらく夜の外出は
控えたほうがいい。知り合い以外からの連絡にも耳を貸すな。」

「……分かりました、気を付けます。ところで、この病室に侘助
ちゃんきました？」

彼、今回は情報収集担当なんですけど。」

「侘助？いや、ここには来ていないが……。たぶん、別の病室に
いる1年生たちの方
に行つたんじゃないのか？あいつ、後輩にはかなりビビられてるか
らな。」

なるほど、それなら彼が上手く話を聞けなかつたことにも納得でき
る。壁に掛けられた
時計を見ると、話を始めてから40分程経つていた。私は立ち上がり、服のシワを手で
伸ばしながら言つ。

「それだけ聞ければ十分です、どうもありがとうございました。後
は私たちに任せて、
コタロウちゃんたちはゆっくり休んで下せ。なるべく早く復帰し
てもらわないと、

その分私の仕事が増えるんですよ。分かってますか?」

「建前はいらないぜ?お前が言いたいことはお見通しだからな。早く良くなつてまた

一緒に部活をしましょ、愛してますよ、コタロウちゃん。つてことだろ?」

彼の軽口に、私は思わずカツとなつた。気がつくと、持つていた力パンを彼の鳩尾に

思いつきり振り下ろしていた。心配して揃をした、さつわと帰らつ。

病室を出て廊下を歩く。ふと、さつきの「タロウちゃんの軽口は、

私を心配させまい」と

する彼の優しさだったのでと考えた。もしやうだとしたら、悪いことをした。

「お詫びこ、ラーメン屋にでも誘つてあげよつかしら・・・。」

私は一人呟き、病院を後にした。

5月1-2日

僕は駅前のベンチに腰掛けっていた。腕時計を見ると、待ち合わせの時間からすでに20分ほど経っていた。

「ヤスの奴、遅いなあ。いつもは遅刻なんてしないのに・・・。まさか、何か事件や事故に巻き込まれたのか・・・？」

いや、心配しそぎかな。そう思いつつ、念の為に電話をしてみた。電車が遅れてる

に違いないと考えたのだが、しばらく待つてみても、一向に電話に出る気配がない。

さつきの心配が、だんだんと現実味を帯びてきた。いやいや、まさか、そんなはずはないだろう・・・。もう一度掛け直すと、今度はあっさりと繋がった。

「おい、ヤス！今どこに居るんだ？いい加減待ちくたびれたぞ。」

「夜須トラヒコは現在電話に出られません。御用があるなら、合図の後に30秒以内で

簡潔に述べてください。まあ、どうぞ。」

ヤスではなく、女性の声がした。しかもこの声には聞き覚えがない。一体誰だ？

そんなことを考えていると、また声が聞こえた。

「・・・30秒経ちました。では、さよなら、大貫山茶花君。
「え、ちょっと・・・と待つて欲しかったなあ・・・。」

謎の女性は有無も言わさず電話を切ってしまった。掛けなおしてみたが、すでに携帯電話の電源はオフになっていた。

「・・・参ったなあ、このままじゃ、『ヘッジホッグス』のライブに行けないぞ。」

そう、今日は人気のロックバンド、『ヘッジホッグス』のライブをヤスと二人で見に行く予定だった。何故男二人かと言つて、ライブハウスへの入場に必要なモノが『硬い絆で結ばれた漢の友情』だったからだ。僕は再び腕時計を見た。

「12時・・・、ライブ開始まであと8時間か・・・。」

僕は立ち上がり、駅に向かった。ヤスの自宅が在る隣町までの切符を買い、電車に乗り込んだ。あいつの両親なら、何か手掛けたりを知つてゐるかも知れない。

扉が締まり、電車がゆっくりと動き出した。その時、ホームから視線を感じた。

目を向けると、そこには、僕を冷たい目で睨みつける少女と、目隠しをされたヤスが立っていた。

「おいおい、入れ違ひって、そりゃないだろ・・・いや、それよ

りもあの子、

どこかで見た気が・・・・・。ああ、ダメだ、思い出せない。」

駅からほどほど遠がつていぐ電車の中で、僕は扉にもたれ掛かつた。

さて、これからどうしたものか・・・。とりあえず、ヤスがあの街に居ることが

分かっただけでも良しとしようじゃないか。あの謎の女の子のこと

は捕まえてから

じっくり思い出せばいい。そうと決まれば、早速応援要請だ。僕は

携帯電話を

取り出し、渡瀬さんにメールを送った。

隣町の駅を出た直後、渡瀬さんから電話が掛かってきた。ああ、そ
う言えば、

彼女はメールが嫌いだつたような気がする。電話に出ると、かなり
慌てた様子で

早口に捲し立てた。

「山茶花くん、さつきのメールつて本当なの！？夜須くんが拉致さ
れたなんて、
あまり信じられないんだけど・・・！」

まあ、無理もない。いきなり友人が拉致されましたと言われても、
簡単には
受け入れられないだろう。

「拉致されたんだと思うよ。田隠しもされてたし・・・。渡瀬さん
は先に捜索を

始めてくれないかな。僕はもう少し手伝つてくれそうな友人を集め
てみるよ。」

「うん、わかつたッ！でも、なるべく早く合流してね？私一人じゃ、
さすがに

限界があるから、そのへんよろしくッ！！」

渡瀬さんはそう言つて電話を切つた。気合入つてゐなあ。本氣の彼
女が協力して
くれたら百人力つてやつだ。さて、次は・・・。僕は続けて電話を
掛けた。

「…………あ？ 何か用か？」

明らかに不機嫌そうな声が聞こえた。どうやら寝起きらしい。

「やあ、おはよう。お前に手伝つて欲しい案件があるんだが、出て来られるか？」

「そうだな、報酬はジャンボパフェ20食でどうだ？」

僕が提案すると、声の主は少し逡巡した後、ダメだと呟つた。

「それじゃあ乗れねえな。バナナジャンボパフェ30食だ。それで考えてやる。」

ぐつ・ぐつ・足下見られたなあ。ただでさえバナナのは高いのに、それを30食はやや金銭的にキツいんだが・・・、背に腹はかえられないな。

「・・・分かった、それで手を打とい。案件は人探しだ。対象は夜須トラヒコ。

顔写真は富流璃に頼めばすぐ手に入るはずだ。どんな手を使ってでもいい。8時

までに見つけ出してくれ。頼んだぞ。」

「おひ、任せる。あつと聞こ聞いたに見つけ出しちゃるよ。」

通話を終え、僕は辺りを見回した。ヤスの家はここからやつ遠くな
い。

「さて、渡瀬さんに侘助、それから富流璃。これでこいつの戦力は
だいたい100人
ぐらいになつたな。あの子がどれくらいの人数を用意しているかは

分からないけど、

この3人を突き崩すのは容易じゃないはずだ。僕は、僕自身が出来ることをさせて
もらいつとするかな……。」

自分で言うのも何だが、僕は顔が広い。この辺のほとんどの住人が顔見知りだ。

ヤスの家から駅までのルートを順に辿つて聞き込みをすれば、何かしらの手掛かりが見つかるかも知れない。僕はヤスの自宅を目指して歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2336v/>

ひまわり シスピリツ

2011年11月27日13時47分発行